

学年・教科の枠組みを超えて学びを「まとめ」「つなぐ」  
キャリア・ポートフォリオの検討  
—中学校卒業期に用いるキャリア・ポートフォリオの比較を通して—

清水 克博\* 胡田 裕教\*\* 角田 寛明\*\*\* 岩城 祥子\*\*\*\*

\* 学校教育講座

\*\* 滋賀県立大学

\*\*\* 東北学院大学

\*\*\*\* 県立広島中学校・広島高等学校

**Examination of a Career Portfolio That “Summarizes”and “Connects”  
Learning Beyond The Framework of Grades and Subjects:  
Through Comparison of Career Portfolios Used for Junior High  
School Graduation**

Katsuhiro SHIMIZU\*, Hiroyuki EBITA\*\*,  
Hiroaki TSUNODA\*\*\* and Sachiko IWAKI\*\*\*\*

\*Department of School Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

\*\*The University of Shiga Prefecture, Hikone 522-8533, Japan

\*\*\*Tohoku Gakuin University, Sendai 981-3193, Japan

\*\*\*\*Prefecture Hiroshima Junior High School/Hiroshima High School, Higashihirosima 739-2125, Japan

## 1 問題の所在

知識基盤社会に生きる児童生徒に次世代の人材として不可欠な資質能力である「学びのプロセスを振り返る力」「学びを通じた自らの成長・変容を自己評価する力」「主体的な学びに向かう力」（キャリア形成型コンピテンシー）を育てることは学校教育の重要な役割の一つである。その手段の一つとして、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を児童生徒が身に付けることができるよう、各教科・科目等の特質に応じたキャリア教育を推進することは、児童生徒にキャリア形成型コンピテンシーを獲得させる上で重要な意味を持つ。学習指導要領総則でも「生徒（児童）が、学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要としたキャリア教育」の推進が求められている（文部科学省, 2017a, 2017b, 2018）。この具現化を図るため、キャリア教育として教科等それぞれの学びを蓄積し、学びの成果を振り返るための資料とな

るポートフォリオ、「キャリア・パスポート（例示資料）」（以下、パスポート）が例示された（文部科学省, 2019a）。その中にある留意事項では、あくまでも例示であり、各地域・各学校における実態に応じて工夫する旨が明記されているように、学校は自校の目的に従ったキャリア・ポートフォリオ（以下、ポートフォリオ）を作成しなければならない。とはいえ、実際に各学校がパスポートをカスタマイズする際にキャリア形成に関わる資質・能力を育成するために必要なポートフォリオの構成要素とその要素を具現化するための作成指針が何かは、未だ示されていない。国並びに県などで示された資料だけでなく、実際に使用したポートフォリオなど、「実際に存在するものを理解する」（サトウら, 2019, P5）ことからポートフォリオの構成要素を解明することは、ポートフォリオを作成するのにあたり欠かせないことである。

## 2 研究の目的

前述の研究背景を基に、本研究では中学校での学び

を「まとめ」、卒業後の学びに「つなぐ」中学校3年の年度末に用いるポートフォリオに焦点を当て、この分析を通じてキャリア教育としての学びを「まとめ」「つなぐ」ポートフォリオの構成要素と作成視点を明らかにすることを目的とする。

筆者らは、キャリア形成型コンピテンシーを育成することを目的として初等中等教育で用いるポートフォリオを作成するためには、学期・学年・学校を超えて学びをつなげる『学びの継続性』、学びを「まとめ」、新たな学びに「つなぐ」ための学びの内省の深さを見る『学びの発展性』、過去・現在、未来と学びを時間的枠組みの視点でとらえる『学びの時間的展望』、「建設的な相互作用の基本形」（国立教育政策研究所，2016）を成立させる『学びの評価』が構成要素として重要であることを明らかにした（清水ら，2020）。さらに『学びの評価』では、自己評価に加えて学習者の学びをよく知る仲間による相互評価を行うことで、学習者の自己評価を補完、強化するとともに、否定的な自己評価を和らげる機能を果たすことも明らかにした（清水ら，2021）。このように各学校が校種、学年、教科の枠を越えて用いるキャリア・ポートフォリオを作成する際の共通枠組みとしての構成要素を明らかにした。

しかし、学びを一定期間ごとに「まとめ」「つなぐ」ポートフォリオを各学校が独自に作成するにあたっての構成要素と、構成要素を具体化するための作成視点は未だ明らかではない。学校が独自のポートフォリオを開発する際の参考としてパスポートが例示された際、同時に「記録の活動のみに留まることなく、記録を用いて話し合い、意思決定を行うなどの学習過程を重視する」（文部科学省，2019b）ことが強調されている。学校がポートフォリオを開発する際、活動結果と学びを書き留めるために作成するのではなく、指導目的に応じてポートフォリオの構成を工夫することが重要である。特に、学校カリキュラムに沿って一定期間行ってきた教科等の学びを横断的、縦断的に「まとめ」「つなぐ」学期末、学年末に用いるポートフォリオでは、教師の指導意図に基づいた構成要素と、指導意図を具現化する作成視点が重要な鍵となる。

そこで、本研究では、中学校3年生学年末で用いるポートフォリオを分析し、学びを「まとめ」「つなぐ」ポートフォリオ作成にあたっての具体的な構成要素と作成視点の検討を行う。

### 3 研究内容

#### 3-1 研究方法

研究にあたっては、国立教育政策研究所のパスポート、県教育委員会が開発したキャリア・ノートを基礎に、県教育センターが調査研究を行って改善した改善試案（永井，2018）（以下、試案）、改善試案を参考に

県下の研究対象校が開発使用したキャリア・ノート（以下、ノート）を比較、検討する。さらに、研究対象校において実施した授業を通じて生徒が記述したノートを取り上げ、記述内容の分析を行う。

#### 3-2 研究対象

パスポートは、小学校から高等学校まで各学年の学年始めや学期末、学年末、学校行事等で使うものが示された。本研究では「中学3年生学年末」（図1）と「18歳の私へ—小学校1年から中学校9年間—」（図2）の2つを取り上げて検討する

試案（図4）は、県教育委員会が公表した「わたしのキャリアノート」のうち、中学校3年生学年末用（図3）を同県教育センター指導主事の永井（2019）が改善したものである。

ノート（図5）は、同じ県内のH中学校（併設型小中一貫教育校）で、2020年2月12日に中学校3年学級活動「9年間を振り返り、自分の成長や将来の自分の姿について語り合おう」で使用したものである（岩城，2020）。ノートは次のように使われた。

1 「(1) 小学校6年間で一番心に残ったこととその理由」「(2) 一覧表に提示された中学校3年間に行ったキャリア教育としての教科等で印象に残ったトップ3とその理由（いずれも選択肢から選択）」「(3) トップ1とその具体的な理由」「(4) 中学校を通じて身に付いた資質・能力の振り返り（選択肢から選択）と、具体的な感想、考え」を授業の前に記入する。

2 授業の始めに小学校及び中学校での主たるキャリア教育としての取組みをビデオで視聴する。

3 ペア（一部3人）に分かれ、(1) (2) (3) (4) を語り合い、気付いたことを話し合ってから「(5) 語り合いから得た感想、気付き」「(6) 語り合いを通じて自分の成長の気づきとその理由」「(7) 語り合いを通じて自己の残された課題とその理由」「(8) 上級学校進学後にがんばりたいこと、大切にしたいこととその理由」を記述する。

4 (5) (6) (7) (8) について、再度ペアで語り合い、語り合ったことを基に最後に「友だちとの語り合いでの気付き」を記述する。

#### 3-3 ノートの学校カリキュラム上の位置づけ

対象校は「知識・技能」「情報収集・判断」「思考・判断」「協力・協働」「感謝・貢献」「責任・使命」「挑戦・探求」の7つの資質・能力の育成を目指して、プロジェクト学習（課題発見・解決学習）を中心に国語、数学、理科、音楽、保健体育、技術・家庭、学校行事、学級活動で構成した学校独自のカリキュラムを編成して取り組んだ。3年生では1学期末、2学期末、学年末に学級活動各1時間を学びをまとめ、つなぐ時間として学校カリキュラムに位置づけている。分析対象としたノートは、カリキュラムに基づき中学校3年の学年末にこ

れまでキャリア教育として行われた教科等の学びを「まとめ」、高校での新たな学びに「つなぎ」結びつけることを目標に作成されている。

#### 4 分析結果と考察

##### 4-1 パスポート、試案と研究対象のノートとの比較

###### (1) パスポート

パスポートは、中学校3年学年末に使用できるよう2つのパスポートが示されている。1つは中学校3年の1年間を振り返るものである(図1)。基礎的汎用的能力に基づく行動面からの自己評価により、自己の成長を捉えさせるため12項目が示され、いずれも「いつもしている」から「ほとんどしていない」の4件法で生徒が自己評価するようになっている。教師用の説明では、12項目を評価させる際、「1年間の主な学習や生活の経験、地域関連のできごとを提示するなど、生徒自身が振り返る際の支援のための工夫」が必要であると指摘している。また、「評価結果を数値化することで卒業後の目標設定の参考にさせる」「1年・2年時との数値比較をさせる」(文部科学省, 2019a)など数値化して成長の度合いを捉えさせ、今後の成長目標を生徒に立てさせようとしている。さらに1年の具体的な成果とその理由を4つの場面(学習、生活、家庭・地域、その他)で振り返らせることで自己の成長を具体的に把握できるように記入項目が作られている。教師用資料では「無理にすべて埋めさせる指導を行わない配慮が必要」「自分の成長を見取り理由を考えることで深い内省と今後の成長意欲につなげる」(国立教育政策研究所, 2019)との留意点が表示されている。しかし、4つの場面の記述欄が設定されているため、蓄積した資料の活用をしないまま、その場で思いついたことを生徒が記述してしまう危うさは排除できない。

もう1つは、卒業を間近に控えて9年間の義務教育全体を振り返るものである(図2)。これは小学校と中学校1、2年のパスポートの活用を前提としたものになっている。学びの成果として小学校の6年間と中学校1、2年(過去)、中学校3年(現在)を振り返らせた上で、18歳という近い将来(未来)での自己像と学びの目標を捉えさせるように構成されており、「学びの時間的展望」に基づく振り返りが仕組みされている。

###### (2) 試案

試案の元となる県の「わたしのキャリア・ノート」では中学校3年の1年間を振り返るようにしている(図3)。1年間の成長を基礎的汎用的能力で評価させ(4件法)、自己の成長を捉えさせてから、中学校での成長について振り返り、気づいたことを記述させている。また、中学校3年生で行った学校訪問、職場訪問をまとめさせ、将来の夢と夢の実現を果たすための進路計画を考えさせている。

試案は県の「わたしのキャリア・ノート」を大幅に改善している(図4)。第1の改善点は、基礎的汎用的能力評価による振り返りを廃し、中学校3年間に蓄積したノートを根拠に自己の成長を捉えさせるように修正された。試案を作り上げた指導主事によると、基礎的汎用的能力を4件法で自己評価させても人により評価が大きく異なり評価根拠も曖昧であること、高等学校で利用されないこと等からこの項目を廃したとのことである。

第2の改善点は、中学校全般を通じての成果(頑張ったこと)と残された課題(そうでなかったこと)を振り返らせた上で、新たな課題(上級学校で取り組む課題)を考えるようにしたことである。

第3の改善点は、将来の夢の内容変更である。キャリア・ノートでは就きたい職業を考えさせていた。試案では、どんな人になりたいかといった大まかな自己の将来像を捉えさせるようにしている。卒業後に取り組む新たな課題を考える時、生徒が職業に限定して課題を考えることがないようにしたと言える。

これ以外に試案には相互評価を行った結果を書き込む項目はないが、教師用資料にはペアによる相互評価を自己評価に加えることを勧めている。相互評価の導入を意図していることがわかる。

###### (3) ノート

ノートは次のような特徴が見られる(図5)。第1に、キャリア教育としての学びの成長を小学校6年間、中学校3年間の計9年間に渡って振り返りを行うようにしている点である。この学校は小中一貫校であること

図1 キャリア・パスポート(文部科学省, 2019b)



18歳の私へ ～小学校1年から中学校3年までの9年間～

記入日 年 月 日

○小学校6年間で一番心に残っていることを18歳の私へ伝えよう

○中学校3年間で一番心に残っていることを18歳の私へ伝えよう

○将来の自分を想像しよう

どんな人になりたいか

そう思った理由やきっかけ

○小・中学校9年間のキャリアパスポートを見ながら、自分自身の成長を振り返り、18歳の私に向けて手紙を書こう

先生からのメッセージ

保護者などからのメッセージ

メッセージを読んで気付いたこと、考えたこと

図2 キャリア・パスポート (文部科学省, 2019 b)

キャリアノート (試案)

記入日 年 月 日

3年 組 番 氏名

1 振り返ってみよう。

中学校3年間で振り返ったとき、自分自身で成長したと感じるのは、どんなところですか。また、それを挙げた理由は何ですか。

中学校生活を振り返って、頑張ったことや、そうできなかったことを書きましょう。それらを踏まえ、上級学校で頑張ろうと思っていることを書きましょう。

【頑張ったこと】 【そうできなかったこと】 【上級学校で頑張ろうと思っていること】

2 考えてみましょう。

あなたの将来の夢は何ですか。

その夢をかなえるために、どんなことを頑張っていますか。

3 振り返って感じたことを書きましょう。

【科目から】

担任からのコメントを読んで感じたこと、考えたこと、これからやってみようと思うことを書きましょう。

図4 県キャリアノートの改訂試案 (永井, 2019)

中学生生徒用

3年 組 番 氏名 ( )

当てはまるところに○を付けましょう。

1 振り返ってみましょう。

自己理解能力	自分の個性やよさを知っています。	
コミュニケーション能力	新しい集団に入ると、積極的に話しかけて人間関係をつくります。	
学習能力	将来進みたい学校や、就きたい職業について調べています。	
職業理解能力	働くことの大切さを知っています。	
進路理解能力	どんな大人になりたいか考えています。	
計画力	自分にふさわしい職業について調べています。	
選択能力	自分の個性や興味・関心のあることに基づいて、中学校卒業後の進路を考えています。	
解決力	学習時には、自分で課題を見付け、積極的に解決しています。	

2 振り返って、思ったことを書きましょう。

3 考えてみましょう。

あなたのよいところやがんばっているところはどこですか。

高等学校等訪問・職場訪問について書きましょう。

月 日 場所 ( )

・訪問して分かったこと

・思ったことや考えたこと

・そこでやりたいと思っていること

あなたの将来の夢は何ですか。

夢をかなえるための、卒業後の進路計画を書きましょう。

4 先生からのアドバイス

図3 県キャリアノート (広島県, 2009)

第3学年 小学校・中学校生活を振り返ろう キャリアノート 書いた日 令和2年2月12日(水)

◎小学校生活や中学校生活を思い出しながら、書きましょう。

[1] 小学校生活で、心に残っていること、なぜ心に残っているか理由を書きましょう。

[2] 中学校で、各学年で行ってきた各「プロジェクト学習」、学校の授業や行事、活動などを振り返り、印象に残った「プロジェクト学習」について、トップ3を選び、〔 〕に1, 2, 3の番号を記入しましょう。また、なぜその「プロジェクト学習」などを選んだか、その理由を書き、近いものを線で結び、トップ1について、なぜ1番に選んだか、その理由を記述しましょう。

第1学年	第2学年	第3学年
〔 〕国語「意見文を書こう!地球温暖化は進んでいるか」	〔 〕数学「確率」	〔 〕数学「平方根」
〔 〕数学「比例・反比例」	〔 〕理科「天気」	〔 〕理科「生命」「地球と私たちの未来のために」
〔 〕理科「生きている地球」「エネルギー」	〔 〕音楽「合唱」「日本の伝統音楽に親しもう」	〔 〕理科「生命」「地球と私たちの未来のために」
〔 〕保健体育「ソーラン」「リレー」	〔 〕技術・家庭科「地域食料と食文化」	〔 〕保健体育「ソーラン」「リレー」
〔 〕英語「ALTに学校生活を紹介します」	〔 〕保健体育「ソーラン」「リレー」	〔 〕英語「ALTに日本文化を紹介しよう」
〔 〕音楽「合唱」	〔 〕英語「ALTに地域について紹介しよう」	〔 〕英語「ALTに日本文化を紹介しよう」
・総合的な学習の時間	・総合的な学習の時間	・総合的な学習の時間
〔 〕「生き方学習」	〔 〕「生き方学習」	〔 〕「生き方学習」
人々の魅力を紹介します	仕事の世界を紹介します	「驚い〜広南避難プロジェクト」
ピリオドワーク	ピリオドワーク	ラム〜
〔 〕「ふるさと学習」	〔 〕「ふるさと学習」	〔 〕運動会
・英語に挑戦!	〔 〕運動会	〔 〕文化活動発表会
〔 〕運動会	〔 〕文化活動発表会	〔 〕修学旅行(あさんど体験)
〔 〕その他の授業や行事、活動など	〔 〕その他の授業や行事、活動など	〔 〕その他の授業や行事、活動など

[印象に残った理由...該当する授業や行事、活動と線で結びましょう。]

- ・もともと好き分野、自分の得意分野を生かせる取組。 ・挑戦問題がおもしろかった。
- ・〔 〕の力が身に付いた(資質・能力)。 ・取り組んでいく過程がおもしろかった。
- ・友だちと協力して成し遂げることができた。 ・新しい自分の力を発見することができた。
- ・苦手な分野だったけど、努力して成し遂げることができた。 ・取組自体が簡単だった。
- ・友だちとけんかして、気まづくなった。 ・取組が苦手なものだった。
- ・その他( )

トップ1の具体的な理由(簡潔書きでもよい)

[3] 中学校で身に付けた七つの資質・能力について振り返り、考えたことや感想を書きましょう。

七つの資質・能力	考えたこと・感想
知識・技能 情報収集・判断 思考・表現	
協力・協働 責任・使命 感謝・貢献 挑戦・探究	

[4] 語り合い

心に残った「プロジェクト学習」などのトップ3について、友だちと語り合しましょう。また、友だちにも感想や気付きを伝えましょう。友だちの名前〔 〕

友だちから言ってもらった感想や気付きを書きましょう。

[5] 語り合い

中学校生活を通して、自分が成長したと思うところはどこですか。また、なぜそう思うのか、理由も書きましょう。

[6] 語り合い

中学校生活を通して、自分にはどんな課題が残ったと思いますか。また、なぜそう思うのか、理由も書きましょう。

[7] 語り合い

上級学校に進学したり、社会に出たりしたとき、あなたはどんなことをがんばりたいですか、あなたが自分の中で大切にしたいこと、努力したいことは何か。また、どうしてそう思ったのか、理由も書きましょう。

友だちと語り合って印象に残ったことや気付きを書こう。

先生からのコメント

保護者からのコメント

先生と保護者からのコメントを読んで...

月 日 ( ) までに提出

図5 H中学校のキャリア・ノート(岩城, 2020)

から、学園目標を実現させるための学校独自の9年間のカリキュラムを作成し、キャリア教育を実施している。このような背景から中学校で使用するノートでも、学園として行った小学校での学びを簡潔に振り返るようになっている。

第2に、中学校3年間の学びの振り返りでは、学校独自のカリキュラムに基づいて実施した教科、総合的な学習の時間、学校行事を学年ごとに表で提示して振り返らせている点である。振り返るべき内容が提示されていることにより、生徒は学校として重視して取り組んだ教科等の学びを振り返るようになる。こうして振り返るべき学びの対象が焦点化した上で、生徒に特に強く印象に残ったトップ3を選ばせるように構成されている。すなわち、生徒の振り返る際、学校カリキュラムに基づく学びに意識を集中させ、学びの成果を考えることができるようにノートが構成されている。

第3に、理由を記述させるのではなく、提示された10の理由から選択させてトップ3と線で結ばせるようにしたことである。自分の考えをうまく言葉で説明できない生徒にとって、ペアの生徒に説明しやすくなっている。なお、示された理由に当てはまらない場合に、理由を記述できるようにもしてある。また、さらにトップ3とその理由を考えてから、それを基点にトップ1とその理由を考えさせ、深い内省を図るようにしている。このように学びの成果を振り返る際、生徒によって振り返りの視点が異なるように工夫がされている。

る。なお、ここまでは事前活動で使用されている。

第4は、学園として目指す資質・能力との関連から自己の成長を振り返るようにしていることである。学校カリキュラム・マネジメントの資料にも役立つように、身に付いた資質・能力とそのことに対する生徒の考えや感想を記入させるようになっている。なお、ノートの原案では、7つの資質・能力に合わせた評価項目を作成し、4件法で評価させるようにしていた。試案を作成した指導主事の助言を受けて、現在の形に直している。

第5に、学びの「まとめ」「つなぐ」ために場面で、試案で導入を勧めていたペアによる相互評価を取り入れ、相互評価の結果を基に再度、自己評価ができるようノートを構成したことである。事前に書いた振り返り結果をペアで語り合わせ、互いの学びの成果を認め合うようにした後に、さらに自己評価を再評価させ、成果と課題を見直す活動が行われている。同様に卒業後の課題を個人で考えさせてから、ペアで語り合わせている。このように学びの姿をよく知る仲間からの相互評価を取り入れてノートが作られている。

なお、パスポート、試案、ノートのいずれにおいても学びの成果と課題をまとめた後、教師や保護者からコメントをもらい、これを基に今後の課題に対して決意を強化するようにしている。

#### (4) 構成要素と作成視点

パスポートでは、3つの構成要素とそれの伴う作成視点が見出された。構成要素は「学びの振り返り」「将来に向けた課題の検討」「第三者評価と決意」である。「学びの振り返り」での作成視点は「この1年間の4場面を通じた成長、小学校6年間、中学校3年間での基礎的汎用的能力の数値による成長の確かめ」である。また、「将来に向けた課題の検討」では、「自己の将来像とその理由、将来像を抱いたきっかけ、自己の成長を基点にした近未来像(18才)のまとめ」となる。「第三者評価と決意」では、「担任、保護者からのメッセージを基にした気付き、感想」が作成視点として確認できる。

試案は、「学びの振り返り」「将来に向けた課題と現状把握」「総合評価」「第三者評価と決意」の4つの構成要素が確認できた。また、「学びの振り返り」での作成視点として「蓄積資料に基づく成長の確かめ」「中学校3年間の成長、取組み成果(頑張ったこと)と残された課題(そうでなかったこと)」、「将来に向けた課題と現状把握」の作成視点として「卒業後の課題克服に向けた検討」「将来の夢、夢の実現に向けた自己の取組みの把握」があった。「総合評価」の作成視点は「振り返りの総括」、「第三者評価と決意」の作成視点は「担任からのコメントとそれを基にした決意」であった。

ノート構成要素は、「学びの振り返り」「相互評価からの再検討と将来に向けた課題」「総合評価」「第三者評価と決意」の4つである。また、作成視点として「学びの振り返り」では「小学校6年間の成長」「中学校3年間の成長とトップ3、トップ1とその根拠」「身に付いた資質・能力とその根拠」であった。「相互評価からの再検討と将来に向けた課題」は「成長の再検討」「課題の再検討」「卒業後に頑張ること」が作成視点として確認できた。「総合評価」では「語り合いの成果の気付き」、「第三者評価と決意」では「担任、保護者からのコメントを基にした決意」が、それぞれの作成視点であった。

#### 4-2 ノートの記述分析

実際に授業でノートを使った時の反応の事実と、教師の作成意図は必ずしも一致しない。ポートフォリオの構成要素と作成視点を明らかにするために、本節では授業で使用されたノートの記述傾向と抽出生徒の発言を分析する。

##### (1) 学びの振り返り対象教科等の実情

図6は、「学びの振り返り」場面で、印象に残った学びのトップ3の選択状況を示したものである。図に見るように、教科では音楽、保健体育以外は一切選択していない。また、音楽の内容は「合唱」、保健体育の内容は「ソーラン」「リレー」「長距離走」と学校行事との関連が深いものである。

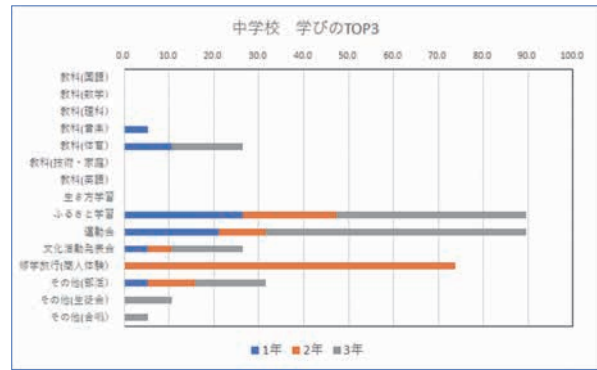


図6 生徒が選択した学びのトップ3の選択状況

トップ3に選択された中で一番多かったのは1, 2, 3年で行われたプロジェクト学習としての「ふるさと学習(1年; 落語に挑戦, 2年; 仕事の魅力を紹介しよう, 3年; 未来貢献プロジェクト(地域避難プログラム)」である。また、2年生の修学旅行(プロジェクト学習としての商人体験)と1, 3年の運動会がトップ3として選択されている。この学校はキャリア教育としてプロジェクト学習を柱にカリキュラムを編成し、国語、数学、理科、技技術・家庭科、英語の教科は各学年でプロジェクト学習に関連づけられて行われている。このように教科もプロジェクト学習に関連づけられているにも関わらず、生徒は教科をほとんど選択していない。

「中学校3年間の成長とトップ3、トップ1とその根拠」の作成視点に基づき中学校3年間を通じた学校カリキュラムで取り扱った教科等の学びを学年別一覧に示して振り返らせ、教科等の学びから成果を捉えさせるように教師がノートを作成しても、生徒は教科での内容を学びの成果としては捉えなかった事実がはっきりする。

教師の作成指針と生徒の実際の評価に差が生まれる理由はいくつか考えられるが、その1つは設問の表記にある。トップ3について振り返らせた設問では「各学年で行ってきた各プロジェクト学習、学校の授業や行事、活動などを振り返り」と表記し、振り返り対象として教科を含めた幅広い学校カリキュラムで取組みに直目させるようにしている。教師は、学校カリキュラムとして取り組んだ全ての学びから学びの成果を生徒に捉えさせようとの意図がある。しかし、「印象に残ったプロジェクト学習についてトップ3を選びましょう」と表記したことで、生徒は「印象に残ったプロジェクト学習」の範囲内で考えるようになり、自ずとプロジェクト学習に振り返り対象を絞らせてしまっている。また、プロジェクト学習で「強く印象に残るもの」は、生徒にとって大きな活動成果を実感できたものである。各学年で取り組んだプロジェクト学習は、学校の外部と大きく関わる活動である。修学旅行の商人体験も同様である。運動会も小学生と共に行う学園として



の運動会である。中学校内の枠組みを越えた外部との関わりは、生徒にとっては大きなインパクトを与える活動である。これに対して教科の学習は、生徒にとって一番日常的な行為であり、印象を与えるインパクトは少ない。教師にとっては、取り上げた教科の学びは、学校カリキュラム上意味があるものであっても、生徒にとっては日常の一つに過ぎない。「印象に残ったプロジェクト学習」と表記するのではなく、「プロジェクト学習（総合的な学習の時間、学校行事）」「プロジェクト学習に関連する教科での学び」と言ったように、作成指針として「非日常と日常の学びを分けた成果の振り返り」を付け加える必要があると言えよう。

2点目は、「中学校3年間の成長とトップ3、トップ1とその根拠」の作成視点において、学びの成果として捉える根拠が生徒によって視点が異なることである。抽出生徒Xと生徒Yの語り合いの記録<sup>注1</sup>を見ると、生徒Xはトップ3を、文化活動発表会、ふるさと学習「起業プロジェクト」、3年運動会の順で選んでいる。生徒Yは、トップ3の最初に生徒会を挙げた。2位は修学旅行の商人体験、3位は運動会である。しかし、選択根拠として生徒X、Yが示した内容は異なっている。生徒Xは、「この時が一番忙しかった」「なんか濃い時間だったかなという感じ」「一番、濃い時間だった」「発表したから」「運動会で副部長として頑張った」ことを理由に挙げている。生徒Xは「忙しい」「濃い時間」「発表した」「頑張った」など「行動結果で得た満足感」を基に学びの成果を捉えていると言える。

生徒Yは「いろいろな活動をして、人に自分の思いを伝えることや、積極的に活動することができるようになったから」と説明している。すなわち生徒Yにとっての学びの成果は、自分の行動変容の自覚である。また、生徒Yは商人体験で「商売をすることの難しさやどうやって工夫すればよいかを学ぶことができた」と語っている。生徒Yは「これまで自分が知らなかったことの気付き」を基に学びの成果を捉えている。

このように「行動した結果の満足感」が学びの成果の根拠とする生徒Xや「行動結果による自己の行動変容の自覚」「行動結果から得た自分が知らなかったことへの気付き」を根拠とする生徒Yのように根拠の視点は生徒によって様々である。

生徒の根拠とする視点が違うことや教科での学びを成果として捉えることができるようにするためには、ルーブリックによる資料提示が必要であろう。特に教科の振り返りに関して「教科を通じてものの見方、考え方がどう変わったか」「行動結果との関わりで教科の学びがどう役立ったか」など生徒が振り返る際の視点が持てるような仕掛けが必要である。振り返りの根拠とする視点のバラツキを少なくするために「学びの振り返り」で作成視点として「ルーブリックによる資料提示などの教師の仕掛けの準備」が必要となる。

## (2) 学びの振り返りを相互評価する場面の実情

「相互評価からの再検討と将来に向けた課題」の実態として、抽出生徒Xがペアの生徒Yの語り合いの記録<sup>注1</sup>を見ると、ノートの構成要素に相互評価を取り入れると高い効果があることがわかる。

1点目は、生徒Yの判断基準の生徒Xへの転移による生徒Xの評価対象の視点の広がりである。生徒Xは当初、文化活動発表会、ふるさと学習「起業プロジェクト」、3年運動会をトップ3に挙げており、生徒Xが務めた生徒会長は対象外であった。こうした生徒Xに対して「いろんな活動をして、人に自分の思いを伝えることや積極的に活動することができるようになった」ことを学びの成果の根拠として、学びの1位に生徒会を挙げた生徒Yは「いろんな活動をする」「人に自分の思いを伝える」「積極的に活動する」に合致する生徒会長は、評価の対象になる。こうしたことから生徒Xに「生徒会って書けばいいのに。書きなさいよ」「生徒会長って書いとく」と生徒会長を評価対象にするよう強く勧める。そして「生徒会長、一番何が難しかった？」と生徒Xに生徒会長での具体的な取組みを振り返らせることで、多忙さ、大変さを感じ取るように仕向ける。このような生徒Yとの語り合いを通じて、生徒Xは生徒会活動を振り返り「文化祭は忙しかった。個人的に忙しかったランキング入ると・・・、(3年生を送る会での)送辞」「3年生を送る会の時のあいさつと、卒業式のときの送辞、期末テストがかぶってきつかった」と自分が取り組みと大変さを思い出す。語り合いにより生徒X自身が自己の活動を思い起こし、生徒Xは生徒会長の取組みを評価し、学びの成果の1位に選び直す。すなわち、生徒Xは生徒Yとの相互評価を通じて生徒Yの評価規準が生徒Xに転移し、自己評価の修正を行ったと言える。このように相互評価をノートの構成要素にしたことは、教師のねらいを具現化することができたと言える。

2点目は、相互評価を取り入れることは、生徒に前向きな姿勢での新たな課題を考えるようになるということである。生徒Xは、語り合いを基に自己の課題を「面倒くさがりやで難しいこととかを後回しにしたりする」と捉えている。これに対して生徒Yは「しょうがないことだよ」「でも、結局終わらすじゃん」と生徒Xの否定的評価を和らげる発言を行う。さらに「結局終わらすから良いと思うけど。駄目なの？」と否定的評価を打ち消す相互評価を行う。生徒Xをよく知る生徒Yは生徒Xの否定的な自己評価を和らげ、前向きな姿勢で新たな課題を考えるように導いている。実際に、生徒Xは「コミュニケーションを大切にしたい。上級学校や社会に出た時、自分の意見を伝えたり相手の意見を尊重したりするのはとても大切だと思うから、相手のやりたいこと、考えていることを引き出し、相手の価値観を見つける」を新たな課題にした。その

上で「自分のまだ足りないことを見つけることができた」と総括し、新たな課題を自己を伸ばす前向き学びの姿勢で課題を見出している。ペアによる相互評価は、自己の残された課題を自覚させるとともに、自己の成長を図る新たな課題に視点を向かせる機能があることが確認できる。このように「相互評価からの再検討と将来に向けた課題」では「自己評価対象の広がりを図るような相互評価の仕組み」「前向きな姿勢での新たな課題設定」が作成視点として付け加えることができると考える。

## 5 結論

パスポートは、学校独自のポートフォリオを開発するための資料として提示されたものである。どの学校でも使用できるようにその内容は最大公約数なものを取り上げている。身に付いた資質・能力を基礎的汎用的能力で示されているも、社会的・職業的自立、社会・職業への移行に向けた力を育てるための要素（中央教育審議会、2011）の中で、どの教科等でも育てることができる資質・能力として示されたことを留意すべきである。本来、児童生徒、地域、保護者の実態や学校の特色を考慮して、学校として育てたい資質・能力を定め、その育成を図ることを目標に教科等を通じて行うことがキャリア教育に求められている。ポートフォリオを通じて資質・能力について振り返る際、学校で育てようとする資質・能力を振り返る必要があり、内容についてはその目的に応じたものにする必要が重要である。単純に基礎的汎用的能力の育成を図ればよいわけではない。しかし、公表されたキャリア教育実践を管見すると、ほとんどが基礎的汎用的能力の育成を目指した実践である（清水ら、2021）。基礎的汎用的能力の中にも4つの資質・能力が定められており、網羅的に育てるのではなく、学校として特に育てたい資質・能力を定め、振り返りをさせる必要がある。

取り上げた試案、ノートはこうしたことを考慮して作成されている。試案は特定の資質・能力を定めていない。学校で蓄積したポートフォリオを使って振り返ることで学校が育てる資質・能力の振り返りにつながることを意識して3年間での成長を振り返るようにしている。ノートは、学校で育てる資質・能力が明確になっている。学校が育成しようとする能力・資質を見据えて学校カリキュラムを編成し、そこでの学びを生徒が捉えるための手立てとして作成されている。特に、学びの振り返りを行う際に、生徒の視点が学校カリキュラムとしての学びに集まるように工夫されている。ノートは生徒に対して学校カリキュラムの具現化に欠かせない道具であるとともに、学校がカリキュラム・マネジメントを行うために必要な資料としての機能を持つ。すなわち、ノートは生徒にとってはキャリ

ア教育として学びの経緯を成果として「まとめ」、新たに生まれた問いの解決を目指す学びに「つなぐ」学びの羅針盤の機能を果たす。また、教師、学校においてノートは、学校カリキュラムの成果を把握し、改善を図るカリキュラム・マネジメントに根拠資料としての意味を持つ。このように考えると「学びの振り返り」の段階で、ポートフォリオの作成視点として「学校として育てようとする資質・能力の育成と関わった教科等の学びを振り返る」ことが必要である。

また、生徒により教科等で行われた学びに対する関心は異なる。ある生徒は音楽に、ある生徒は数学にと、自己のものの見方、考え方にまで影響を与えるものは異なる。生徒の学びの関心が異なることを念頭に置き、生徒個々の学びの成果を「まとめ」、次の学びに「つなぐ」必要がある。そのためには、「学校カリキュラムとして取り組んだ教科等の中で、特に自分に役立ったと思う教科等の学習活動の選択させる」と「選択を容易にするために、学校カリキュラムの柱となる教科等の一覧の提示する」が作成視点として必要となる。

以上の結果から構成要素と作成視点をまとめると表1のようになる。なお、ノートについては本研究で見出した作成視点を加え、斜字で表記する。

構成要素は4つある。まず、これまでの学びを振り返り、学びの状況を捉えることを行っている「学びの振り返り」である。従って、「学びの振り返り」がポートフォリオ作成にあたり最初に位置づけるべき構成要素であると言える。次に考えるのが、学びの振り返り結果からこれから新たに取り組む課題を検討し、見出す段階である。相互評価も用いて行うことから「自己評価、相互評価に基づく身近な将来に向けた課題の検討」とする。そして、試案、ノートで見られるように、総括的に振り返り成果を見直す段階でこれを「総括的な評価」とする。最後は、いずれにも見られた教師、保護者からのコメントを基盤に新たな課題への取り組み意欲を高めることを目的としたものである。そこで「第三者評価を基盤にした決意」とする。

以上のように、中学校3年年度末において3年かのキャリア教育での学びを「まとめ」「つなぐ」ポートフォリオの構成要素を明らかにした。また、構成要素を機能させるための作成視点についてはノートの作成視点を通じて明らかとなった。

今回の研究で残された課題は、キャリア教育として一定期間行った教科等の学びを振り返る際、ポートフォリオの工夫がされても教科での学びの振り返りが十分行われていないという事実である。学習指導要領で示されているように「特別活動を要しつつ各教科・科目等の特質に応じて、キャリア教育の充実」（文部科学省、2017a、2017b、2018）が求められている。教科での学びを児童生徒のキャリア形成につなげることは極めて重要である。また、教科等の学習レベルを



表1 パスポート、試案、ノートの各構成要素とその作成指針

構成要素	作成指針		
	パスポート	試案	ノート
学びの振り返り	<ul style="list-style-type: none"> <li>基礎的汎用的能力に基づく評価表 (4件法)</li> <li>小学校6年間、中学校3年間での基礎的汎用的能力の数値変化に基づき成長の確かめ</li> <li>4場面を使って1年の具体的成長の確かめ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>蓄積した資料を手がかりに成長の確かめる</li> <li>中学校3年間の成長</li> <li>取組み成果と残された課題</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>蓄積した資料を手がかりに成長を考える</li> <li>小学校6年間の成長</li> <li>中学校3年間の成長 (選択)</li> <li><b>非日常と日常の学びを分けた成長の振り返り(選択)</b></li> <li>トップ3と根拠(選択)</li> <li>トップ1と根拠</li> <li>身に付いた資質・能力と根拠</li> <li><b>ルーブリックの提示などの評価規準資料の工夫</b></li> </ul>
自己評価、相互評価に基づく身近な将来に向けた課題の検討	<ul style="list-style-type: none"> <li>18歳の将来像と理由</li> <li>将来像を抱いたきっかけ</li> <li>自己の成長を基点とした近未来像のまとめ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>卒業後の課題克服に向けた検討</li> <li>将来の夢</li> <li>夢の実現に向けた自己の取組みの把握</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>成長の再検討</li> <li>課題の再検討</li> <li>卒業後に頑張ること</li> <li><b>自己評価対象の広がりを図る相互評価の仕組み</b></li> <li><b>前向きな姿勢での課題設定</b></li> </ul>
総括的な評価		<ul style="list-style-type: none"> <li>振り返りの総括</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>語り合いの成果と気づき</li> </ul>
第三者評価を基盤にした決意	<ul style="list-style-type: none"> <li>担任からのメッセージ</li> <li>保護者からのメッセージ</li> <li>メッセージでの気づき、感想</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>担任からのコメント</li> <li>コメントを基にした決意</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>担任からのコメント</li> <li>保護者からのコメント</li> <li>コメントを基にした決意</li> </ul>

※特に ( ) で注記がないものは全て自由記述  
 ※斜め字：研究の結果から出た新たな作成視点

「知っている・できる」(事実的知識・技能の獲得)、「わかる」(概念的知識、方略の獲得)、「使える」(原理・方法論の獲得) レベルに階層化した上で、「使える」レベルまで到達させながら教科等の固有の見方・考え方を獲得する「真正の学習」のあり方が示された現在、教科で行われた「真正な学習」を教科内に留めるだけでなくキャリア形成につなげる必要がある。これを実現するためにも、その前段となる教科の学びの振り返りの在り方をキャリア教育として明らかにする必要がある。今後は、教科の学びを振り返り、その成果を「まとめ」新たな学びに「つなぐ」授業の在り方をポートフォリオとの関係で解明していきたい。

付記：本研究は、[JSPS 科研費 JP21K02434](#) の助成を受けたものです。

注1 生徒Xと生徒Yのペアの逐語記録は紙幅の都合上、表記していない。詳しくは、清水克博・胡田裕教・角田寛明 (2021) 「キャリア形成型コンピテンシーの育成を図る指導要素の解明—小中一貫学園のキャリアノートを用いた実践の授業分析を通じて—」愛知教育大学教職キャリアセンター紀要第6号、p32-33で確認されたい。

【参考・引用文献】

岩城祥子 (2020) 学習指導案「9年間を振り返り、自分の成長や将来の自分の姿について語り合おう」  
 国立教育政策研究所 (2016) 『国研ライブラリー：資質・能力理論編』 東洋出版社

サトウタツヤ (2019) 「序章：質的研究法を理解する枠組みの提案」、サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実編『質的分析法マッピング：特徴をつかみ、活用するために』新曜社  
 清水克博・胡田裕教・角田寛明 (2020), 「初等中等教育におけるポートフォリオを活用したキャリア教育の現状と課題—学びの発展性、時間的展望、発展性と学びの評価の観点からの考察を通して—」、『愛知教育大学教職キャリアセンター紀要』5, pp49-58.  
 清水克博, 胡田裕教, 角田寛明 (2021), 「小学校キャリア教育実践の現状と課題—教科等で育成する資質・能力からの分析を通じて—」, 日本特別活動学会第30回東京大会自由研究発表要旨  
 永井博美 (2019) 「学校の特徴を生かした「キャリアノート」の効果的な活用—高等学校での取組から—」広島県立教育センター平成30年度プロジェクト研究報告書型  
 文部科学省 (2017a) 『小学校学習指導要領 (平成29年告示)』  
 文部科学省 (2017b) 『中学校学習指導要領 (平成29年告示)』  
 文部科学省 (2018), 『高等学校学習指導要領 (平成30年告示)』  
 文部科学省 (2019a) 「キャリアパスポート (例示資料)」  
 文部科学省 (2019b) 「キャリアパスポート (例示資料) 中学校教師用」

(2021年9月24日受理)